様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２２１６

研究課題名（和文）中世後期における百科事典的作品と武家故実の相関性に関する基礎的研究

研究課題名（英文）Basic studies on correlation of the encyclopedic literature works and the classical samurai cord in the later medieval Japan.

研究代表者
小助川　元太（Kosukegawa, Ganta）

愛媛大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３５３３１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世後期の政治や文化を支えた「知」のありようや意味について、百科全書的な特徴を持つ文芸作品群の生成と武家の学問との関わりという視点から解明した。具体的な成果は、以下の通りである。１．和訳本『帝鑑図説』が単なる明版『帝鑑図説』の訓読ではなく、中世の学問の成果を踏まえたものであることを論じた。２．『源平盛衰記』が中世の武家の実用的な教養書を志向していた可能性を指摘した。３．行誉書写本『八幡宮愚童訓』の特徴や『ｱｲ嚢鈔』との関係を明らかにした。４．武家の儀式の場に飾られた書物の変遷を通して、武家の学問と支配階級としての武家のアイデンティティ形成の関係について論じた。

研究成果の概要（英文）：I researched about the issue that encyclopedic "knowledge" supported the politics and culture of the later medieval Japan. Especially, I proved that encyclopedic literature works had had a great influence on the samurai family society. The result of the study is as follows. 1. I pointed out the possibility that "WAYAKUBON-TEIKAN-ZUSETSU" had not only been simply translated "TEIKAN-ZUSETSU" in the Japanese way but also had had influence of the study of the samurai family of the later medieval Japan. 2. I discovered that "GENPEI-JOSUI-KI" had been written as a practical educational book for the children of samurai family. 3. I clarified that influence relations of "HACHIMAN-GUDOKUN" and "AINOUSHO". 4. I discovered that the book as the decoration tool of the room which was used for ceremony of the samurai changed as the times changed. From that, I pointed out the education of samurai family in the Muromachi era had affected the formation of identity as the governing classes.

研究分野：日本文学

キーワード：百科全書的文芸　中世後期　武家故実

１．研究開始当初の背景

申請者は室町時代の百科事典『壒嚢鈔』や、戦国武将による百科全書的編纂物『月庵酔醒記』、漢画の享受を背景として編述された画学全書『後素集』などを、中世日本社会に特有の知的営為を共通の背景として成り立っている編纂物と考え、それらを仮に「百科全書的テキスト」と名付けた。これらの作品群に共通する特徴は、以下のとおりである。

１．物事の既験や約束事、故事などの情報を読者に示すことを目的とした書物である。
２．先行する特定の作品に依存せず、それ自体が一つの作品として成り立っている。
３．中国の類書の影響もあるが、編者の編述目的・用途などに応じて、独自の編纂方法を採っている。
４．記事内容が、先行資料からの引用ばかりではなく、雑談や講釈（注釈）、聞き書きといったオーラルな媒体や、舶来の絵手本・粉本等の図像媒体を通して蓄積された編者個人の知識によっている。
５．国家的事業としてではなく、それぞれの目的に応じて、一つの形にまとめていこうとする個人の意志によって成り立っている。

申請者は、「中世後期成立の百科全書的テキストに関する基礎的研究」（基盤研究（C）平成 21 年～23 年、課題番号 21520226、代表者：小助川元太）において、上記のような特徴を持つテキストのありかたを、中世特有の一つの表現様式と捉え、それらに共通する特徴を洗い出し、整理する作業を行うと同時に、それらの編者を取り巻く環境に関する調査を行った。さらに、その次の段階の研究である「中世百科全書的テキストの成立基盤に関する総合的研究」（基盤研究(C)平成 24 年～26 年、課題番号 24520218、代表者：小助川元太）において、研究の対象を百科事典的な編纂物から、百科事典的な特徴を持つ物語群へと広げ、それらの生成や享受の問題を解明するべく調査を進めてきた。具体的には上記三作品に加え、物語の中で雑談（ぞうたん）問答が行われるという設定で、読者に対して百科事典的な知識を披瀝していく『塵滴問答』『旅宿問答』『筆結物語』『塵荊鈔』といった物語群や、既存の物語に百科全書的な知識が挿入される形をとる軍記物語『源平盛衰記』などを調査対象とし、それらに共通する特徴や傾向を洗い出すという作業を行った。この二つの研究を通して、調査対象となった作品には、以下の共通点があることがわかってきた。

１．中世後期成立の百科全書的テキストには、項目が連想的に展開する事例が多く見られる。
２．諸書に取り上げられる項目には、仏教や神道に関わる事項に加え、四書五経、「武の七書」や武具・弓馬に関する故実、和歌・連歌に関することなどが取り上げられる傾向がある。
３．その情報源や編述の背景に同時代の知識人の存在がある。
４．百科事典的な知識の披瀝と儒教的政道論とが結びつきやすい傾向にある。
５．登場人物の会話の内容や、編者自身の言説など、取り上げられる事項以外の部分に、武家の子弟に向けて書かれたことを推測させる叙述が見られる。

上記の共通点から見えてくるのは、まず、これらの百科事典的傾向を持つ作品が、武家の子弟を対象として書かれた可能性である。そして、その上で考えなければならない問題は、室町中期から安土桃山時代にかけての乱世における百科全書的な「知」の位置づけであろう。出版による書物の大量生産が行われる以前の中世日本社会において、諸書から得られた知識はかなり貴重なものであったは

ずである。現代の我々から見ると、これらの知識の羅列は、単なる知的好奇心による趣味的な営為に見えるかもしれないが、いかなる知であっても、それが「智恵」と結びつく側面を持っていたであろうことに留意しなければならない。中世後期の武士が和歌を詠む必要に迫られていたこと（小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか』2008 年）なども、こういった「知」の問題と深く関わっており、実際、上記の書物の中では必ず和歌に関する話題が取り上げられている。武士が乱世を生き抜くためには、種々雑多な百科事典的「知」が必要とされていたと考えられるのである。なお、そういった「知」の摂取の場として「雑談（ぞうたん）」があったことは、すでに指摘したことがある（小助川『行誉編『壒嚢鈔』の研究』2006 年）が、百科事典的傾向を持つ物語が、問答の場を設定し、その問答がほぼ例外なく連想的に展開することは、そうした場が当時の社会の中で、実際に知の伝授の場としての機能を果たしていたことを伺わせるものである。

中世後期に百科事典的特徴を持つ書物が陸続と登場した背景としては、とくに情報メディアが限られている中世の社会においては、仏教法会等における唱導や、四書・和歌・物語といったテキストの講釈、能や平曲などの芸能の他、雑談のようなオーラルな場は、知識を増すための貴重な機会であったはずである。とくに中世後期において、雑談問答を中心とした物語や、説話・金言成句などを盛り込んだ軍記物語が登場するのは、そうしたオーラルな学習機会の存在と無縁ではないだろう。

こうした文学作品を中心とした中世後期における「知」を廻る様相や、その社会的意味の問題については、これまでの申請者の研究により、少しずつ解明されてきたが、まだ十分に明らかになったとはいいがたい。とくに当時の武家の学問との関わりについては、まだ課題を多く残している。本研究が達成されたときには、文学のみならず、思想史や政治史、仏教史、美術史など隣接する分野にも大きな示唆を与え、新たな日本文化史研究の構築を促すことになるであろうと考えた。

２．研究の目的

本研究の主たる目的は、応仁の乱から徳川幕府による天下統一までの、いわゆる中世後期を中心とした乱世における政治や文化を支えた「知」のありようや意味といった問題を、百科全書的な特徴を持つ文芸作品群の生成と中世後期のおける武家の学問との関わりという視点から解明していくことにある。

申請者は室町時代の百科事典『壒嚢鈔』や、戦国武将による百科全書的編纂物『月庵酔醒記』、漢画の享受を背景として編述された画学全書『後素集』などを、中世日本社会に特有の知的営為を共通の背景として成り立っている編纂物と考え、それらを仮に「百科全書的テキスト」と名付けた。本研究は、従来の文学作品中心の研究では顧みられなかったそれらの作品を、一つのジャンルとして取り上げ、それらに共通する特徴を分析し、さらにはそれらが成立した社会的文化的背景、とくに武家故実の成立と伝授の問題との関わりを明らかにすることによって、中世後期特有の知的営為に迫り、その歴史的文化的意義を問うものである。

３．研究の方法

研究開始当初は，前記の研究目的のもとに，対象とした和訳本『帝鑑図説』、『壒嚢鈔』、『後素集』の電子テキスト化作業を進めつつ、『源平盛衰記』を中心とした作品の本文分析作業と室町時代に制作された武家故実書との比較作業を行った。なお、武家故実を調査する過程で、武家の儀式の座敷飾りに百科全書的文芸において重視された書物が飾られていることを発見し、武家の儀式の場における座

敷飾りに関する調査も進めることにした。具体的な研究方法と手順は以下のとおりである。

⑴対象となるテキストの電子化作業

和訳本『帝鑑図説』、『壒嚢鈔』、『後素集』の電子テキスト化の作業を進めた。

⑵『源平盛衰記』『筆結物語』『塵荊鈔』の本文分析作業

百科全書的文芸の中でも後世の武家の教養に大きな影響を与えた作品である『源平盛衰記』について、他の平家物語諸本と比較しながら、異なる記事内容を抽出するとともに、その特徴を分析する作業を進めた。また、内容応仁の乱後の成立と考えられる『筆結物語』『塵荊鈔』の中で、武家の教養や武家故実に関わる記事を抽出し、武家故実書との比較作業を行った。

⑶『壒嚢鈔』の成立と享受に関わる調査

『壒嚢鈔』成立に関わる問題を解明するため、編者行誉の書写した『八幡宮愚童訓』の諸本における位置づけや『壒嚢鈔』との関係を調査した。また、申請者が発見した『壒嚢鈔』新テキストの書写奥書をもとに、その享受に関わる調査を行った。

⑷武家の儀式の場における座敷飾りの調査

武家故実や百科全書的文芸に見られる武家の教養のあり方を体現するものとして、南北朝から江戸初期にかけての資料に見られる、武家の儀式の場における座敷飾りの調査を行った。

⑸その他、中世の武家の信仰や思想を表す作品の分析

中世から近世初期における武士に大きな影響を与えた八幡信仰のもととなる『八幡愚童訓』や東国の武士の信仰を示す『神道集』の作品分析を行った。

４．研究成果

⑴和訳本『帝鑑図説』の電子テキスト化

『壒嚢鈔』『後素集』の電子テキスト化は他の作業に時間を取られて思うように進まなかったが、以前から進めていた和訳本『帝鑑図説』の電子テキスト化は完成し、勤務校の紀要に公開した。また、その作業過程で行った明版『帝鑑図説』との本文比較の結果、和訳本『帝鑑図説』が単なる明版の訓読ではなく、日本の中世における学問の成果を反映させたものである可能性が高いことがわかった。本研究の成果の一部は、学術交流協定校である遼寧師範大学で開催された国際シンポジウムにて報告し、その報告書に簡単な概要を掲載した。なお、この問題については、今後さらに詳しい分析と調査を行う予定である。

⑵武家の教養書としての『源平盛衰記』の特徴の発見

平家物語諸本における『源平盛衰記』独自の記事を分析する中で、『盛衰記』が史実を伝える資料に基づいて既存の平家物語を語り直しているという特徴を持っていることに加え、戦術や作戦を中心に合戦を描き直していく様子が『筆結物語』における故事引用のしかたに通じていることを発見した。この分析の結果については、学会で口頭発表を行い、学会誌にも掲載された。『源平盛衰記』の本文分析はまだ緒に就いたばかりなので、今後も独自記事と武家故実や百科全書的文芸との比較を中心に研究を続けていきたい。

⑶行誉書写本『八幡愚童訓』の特徴と『壒嚢鈔』との関係について

中世の百科全書的文芸の代表である『壒嚢鈔』の成立と享受については、申請者が発見した新たなテキストの奥書の情報をもとに、調査を進めたが、思うような成果が出なかった。ただし、行誉が書写した甲類系『八幡愚童訓』の諸本における位置づけが、各地に残る甲類系『八幡愚童訓』テキストの中でも、比較的古い形を残している可能性が高いことや、『壒嚢鈔』との共

通部分の分析から、行誉が自ら書写した『八幡愚童訓』を『壒嚢鈔』編述に利用していたことがわかり、さらにその利用態度も含めて、新しい知見を示すことができた。この研究成果については、『唱導文学研究第十一集』に掲載している。今後は本課題研究期間中に進めることのできなかった新たな『壒嚢鈔』テキストの分析や『塵添壒嚢鈔』の成立の問題も含む『壒嚢鈔』の中世後期における享受の様相についても調査を進めたい。また、行誉書写本だけに留まらず、武家の思想に影響を与えた作品としての『八幡愚童訓』の研究も行う予定である。

⑷武家の儀式における座敷飾りの研究

武家故実の調査の過程で、南北朝から江戸時代にかけての武家の儀式の場における部屋飾りが、百科全書的文芸に描かれる武家の教養を体現するものであることに気付き、部屋飾りを掲載する資料調査を行った結果、座敷に飾られる書物が、時代によって変遷していることがわかり、それらが中世後期の百科全書的文芸に示される、武家の子弟が読むべき本と一致することがわかってきた。その成果の一部については、2017 年 4 月の軍記・語り物研究会で発表し、その際の出席者からのアドバイスに基づき、さらに調査を重ねたものをまとめ、同年 10 月にアメリカのカリフォルニア大学サクラメント校で開催された国際会議で、「*"Gunsyo"* as a tool for Samurai to conduct ceremonies during the Edo period」と題する発表を英語で行った。なお、この研究は緒に就いたばかりなので、今後も継続するつもりである。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① 小助川元太、「日本における明版『帝鑑図説』復刻と和訳本出版について」（『平成 28 年度愛媛大学国際連携促進事業　愛媛大学・遼寧師範大学学術交流協定 30 周年記念誌「新たな歴史に向けて」―交流 30 周年記念シンポジウムを中心に―』、2017.3、6-7）

② 小助川元太、「『源平盛衰記』の日付設定―殿下乗合事件・水島合戦・山門奏状を中心に―　」（『西日本国語国文学』3、2016.7、16－29）

③ 小助川元太、「〈翻刻〉奈良県立図書情報館蔵『帝鑑図説』（寛永四年刊本）巻一一～巻一二」（『愛媛大学教育学部紀要』62、2015.10、255－263）

〔学会発表〕（計 8 件）

① *Ganta Kosukegawa, "Gunsyo"* as a tool for Samurai to conduct ceremonies during the Edo period, CSUS 3rd Interdisciplinary Conference in the Humanities: "From Ancient to Modern", California State University Sacramento, 28 October 2017

② 小助川元太「儀式の道具としての軍書」、古典研究会、広島大学、20170924

③ 小助川元太「儀式の道具としての軍書」、軍記・語り物研究会第 413 回例会、青山学院大学、20170423

④ 小助川元太「湯月八幡宮の再興と武の物語」、シンポジウム「八幡信仰と大名家文化の編成」、仏教文学会説話文学会合同例会、同志社大学、20161217

⑤ 小助川元太「日本における明版『帝鑑図説』復刻と和訳本出版について」、愛媛大学遼寧師範大学学術交流 30 周年記念シンポジウム、遼寧師範大学、20161104

⑥ 小助川元太「湯月八幡宮と武の物語」、古典研究会、福岡大学、20160924

⑦ 小助川元太「『神道集』「神道由来の事」を読む」、シンポジウム「安居院作『神道集』を拓く」、伝承文学研究会大会、南山

大学、20150905

⑧ 小助川元太「『源平盛衰記』の日付設定」、西日本国語国文学会大会、長崎大学、20150920

〔図書〕（計５件）

① 福田晃・中前正志編『唱道文学研究第十一集』、三弥井書店、201806、（担当部分）小助川元太「行誉書写本『八幡宮愚童訓』考」、pp.189-pp.218

② 松尾葦江編『ともに読む古典　中世文学編』、笠間書院、201703、（担当部分）小助川元太「室町時代を遊んでみよう―御伽草子『ものくさ太郎』を読む」、pp.211-pp.227

③ 日下力監修、鈴木彰・三澤裕子編『いくさと物語の中世』、汲古書院、201508、（担当部分）小助川元太「乱世における百科事典と文学―中世後期の武士の教養―」、pp.313-pp.330

④ 松尾葦江編『源平盛衰記年表』、三弥井書店、201507、（担当部分）高橋典幸・小助川元太「源平盛衰記記事年表」、pp.11-pp.132、山本岳史・原田敦史・平藤幸・辻本恭子・小助川元太・伊藤慎吾「源平盛衰記巻別記事表」、pp.185-187（巻 11）、pp.193-pp.195（巻 13）、pp.211-pp212（巻 18）、pp.213-pp.214（巻 19）、pp.244-pp.248（巻 27）、pp.268-pp.271（巻 33）、pp.300-pp.304（巻 41）、pp.318-pp.321（巻 45）

⑤ 松尾葦江編『文化現象としての平盛衰記』、笠間書院、201504、（担当部分）小助川元太「『源平盛衰記における文覚流罪』―渡辺逗留譚を中心に―」、pp.89-pp.105

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者　小助川　元太
（KOSUKEGAWA,　Ganta）
愛媛大学・教育学部・教授
研究者番号：30353311

(2)研究分担者　なし
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者　なし
（　　）
研究者番号：

(4)研究協力者　なし
（　　）